雪色美艷媚語
四編
ヘ 13
3225
5

へ 13
3225
5

昭和十年七月四日

茶儀榮

春色英對暦語巻之十一

梅暮里拾遺別傳

江戸　爲永春水著

第二十一章

我も／＼ものゝ分きてゞ人よ／＼ら／＼今ハ夜ぶかの神をのゝゝゞ
きく／＼と称て男の分を称らげ再度賜ゝゝゝら／＼自女の
支／＼おかゝ／＼よを例ゝゝ引大和物語の鑑ゝゝ文を乳母ゝゝ
嬢ゝゝて男紙ゝゝゝゝば自然和て落涙も止ものゝ多ゝ嬢ハ
ものゝゝゞ廓ゝゝありて情人ゝ／＼父母ゝ大ゝに奉公ゝ／＼家ゝ

久
帰り、母を養うんあるが宗次郎の世話をうけて母を養うく
あんど
安堵せーゴ
伝の道理のあるこは言うう今八隅てーの男八ぶやうく母を八
氣休めを言うて亜ども便りを寄ごて神ごのくゝ信ぶる
妙見宮人彩無くゝ参詣ーゴ今宵も同ご時刻あれう
詣りを上て立帰る路の真中宗次郎ふひーを伝合顔
見あうせ　塔　ヨヤ　ぶうくうくうくう　宗　妙見さまへ
参るくさのうト唯伝氣を言ーて伝うんうんする神妙

ひと人　塔　ひとり見ぶちうとあ参をうて歩下ーゴ伝幸
あ頼ひでどざるまーうトのうまてさとぶ振切つて別ゴ
稽の科もゴーゴ生涯やきーき宗次郎ゴ立止ゴてのの
私うくの　宗　うんゴ用ぶ有ゴぶ今かーゴ急ぶう明日ゴす
宅へ行ふョ　塔　左様でもどざるませうが又歩る入て歩ふ
うひと私ぶうやう母人ぶ参ぶーゴて夜もうくゝ別ゴます
のョ伝幸あきでも仕ふでゴ見ふうくとが私の僥倖ゴ
君の出不肖とあぶーゴやーてマア参成て歩下ーゴト

言ひつゝ眼には涙をうかめあかんがやるせなき名残を見送る袖を
そこらで別れもならず無據連立て 宗「サア丈なら八同伴に
ちかよつて並んで歩行衣の褄 他所目にも羨しお增のすがた
婀娜なる色香にさしも浮世ぞ 往来ハそゝる俤も互ひの
心の種くの思ひハおなじ衣の情隔てしより遠慮がち言
葉もとけなく氣の毒さうな躰てお增の家まで行つ敷居も
高く母親の前も耻て宗次郎 宗「母上御无沙汰せ仕
まりましたト見る人通れべお増の母 母「まア旦那かへ御機嫌よう

たり宅にもあく 於増と両人で毎日々々お噂ばかりやつて居りま
ましてそれでもお増が我修者でござりますからもう急度去年の
お氣に障ることが有て以所へお出遊さぬと日々のごと私が娘
に小言を申ましたトいひながら茶を汲で出し火鉢をそろへ
母「アヽ引やうしよくマア今迄でも今夜お出遊ばして下さいましたネ
エお増やお前さんハ其所でお目にかゝりさの人 増「イエ妙見様
の前でお目にかゝりて無理にお連申しましたトいひながら
首に持し珠數をお祖師さまの前へ置 火鉢の隣人座

塙「是程お不相手ニ内用ゴボラウませうけまでも今夜八伺
幸山ゆうやをおそうて行下まして稚くおそくー十
度度がおやまりたうら家「左様ニ実ハ急ぎ用もあるけれ
ども遠近の度ごうう今夜ア山宅ニ居様ヨ毋仕お世話
でも横所の顧でも左様いうて呉ろ 塙「ヨヤ私やア今晩
家へお着を跳へまーこヨ家「左能ハ両方あつても邪ア
ハうこうれ人トいへ第お塙ハ家次郎の顧をぢろと見る見
ハたーこうふ柳川のこうを閑て居る玉泉寺と柳川のう

ふ引當て両方とのうが耳ニ当て男の顧を視ろをかべー
さてこまつうり酒着も本ちと久ーぶやうる酒のやふ時刻
もうろる其中ニ けいりぶ桑ふせうまう度を彼是と毋ハ
家次郎ニ言のごせど お塙ハ一言も恨ふ彼のハぶよき程よ
今夜て家次郎「の外を和うげる様よおうをして居る今夜
夜通ーみうぶを尽ーてつあひうきをするう只情合て
引戻もうの胸ニ無用をすると男ハ是ニ驚もげるふ毛
数を金ケ子の刺酒ニうを塙ふ郎戸に入けるゴ毋も

二番にて寝まづまを世ろも密と申しまして家庭帝の
撫燈を續ひ申ぐらを塔八のも氣の毒そよ 塔アノ子
家ゝえんご 塔ゝナニヤモ氏ものヨ 家ゝナゼえんごう左根いのが
いろ子 塔ゝイエモモでも万一お希さんが腹をあまごを行
ませんものヲ 家ゝナニ形して来て見まば則可愛ものの
ものごとものヲ何でも腹を立ハ仕ようと左根いろて
関せるゝ 塔ゝ左根申ばこ高ぎ氏がよう申ば氣ヲ陸て
おんなの方下さいまし氏 家ゝナニ氣ヲ當ハ仕ようと久しく不来ヨ

居ゝ中情人が出来て ゝ方の世話ふり成ゝ人の女
房ふ申ば成ゝふのゝ不義ゝ初ぐ警ゝ行根きゝも
ゝ身と離別てゝ人ゝ仕舞とゝ人のを申ば赤の望
の通ゝふ仕て居ゝが出て居るのを止て呉ろ
とゝ申ば成て出来ね人 塔ゝア甚根る空だろうトゝ申ハ
ゝどゝゝ人ゝ腹しゝ張をあゝば成ゝ申ゝ情合ハ
深ゝ申ゝども仕ようと考へ申ゝ不宮成ゝ人ゝ申ば誠も
不屈を思業して 塔ゝナニ戯言ゝも情人の衰のゝゝる

あるも仕ようせんョ初めして半年過ぎ山所へおいとまをもらう
夫中も一日の暇も不自由の身の極まりてお暇をすること
内儀をおろそかふ男川てすまぬものゆえ内儀ふ支度
物ゞ一倍の脳でどざるまして
これ此月が勝手で不暇ふ居ることをいうて女房や奥様嫌せぬ
ものゝ　増へヨヤ女房とゝ　宗へとの可愛女房のこゝを
ト お増の笑口の所を横ちてちゝのとき　増へヲホヽヽヽ
空だろうゝお内儀さんゝ人柳川さんゝゝお成のごろら

所在私ゞまんと男川ても及ばるの変てどざるまするョ　宗へ
誰ゞまん私ゞるこゝを言うて同せる　増へ誰ゞいうぞこゝも自
我ゝ　お初　さんゝ人ゝゝゝゝゝ　ちゝをいうて見まするとこの
らんの取人お出の途中で雨の降さのゞ私の僥倖まるま
きこのごろう柳川さんの方ゞ縁ゞ先ゞでどざるまするゝゝれ
だろう私ハおるゝゝゝて居てお帰さんまするで捨らと
さゝ仕ようけまゝば宜どざるまするョ　宗へナンノ捨るゝゝるゝ
バ掴ろうゝゝゝ世話ゝゝて人ハナ丈ゝゝ

お茶の事へ揉くみこまれが関えもして居るばかりが實は
始終は お稽古を女房まを極くをを宅あて 當時の
所で 分合の女帝買ばかりをしまをこをてりまりばかり
情男は ねんがつくヨトつまをて お稽は涙を落して 拙ふ傍き
泣て居る 家ヲヤ 女帝買てを 此所へは 来ねんといつ
が 嫌しらりて 泣のろ エエこをサ 嫌へイエ 左様ではござりまま
せんヨ お茶さんが 内儀ふ 苦労して お主の中で 私ども 那
あて ほんで 活業て居ては 異利が 尽ども まるー 第一

さんが 此本 店の 主や 仏の 子で 彼是 浮山 苦労 成よりる
帝ふ多りてもおしは 私が 知ることでも お茶をのまふ
多へでは 悪返しも 出まをお 側まも 居通さを なりは
根よ多りては 他の男は くも 悔しふ ござりまは
備が 如何 言おしる 主の名は いつふと いつよ 當時家
次帝の本店 相場 ごふかをて 大をふ多 損もー
世間の 評もあしく うりて 出店の 家次帝より 主
分の 金を本家へ 入を 外 借金を 引清て 浜方

ゑぼして宮尻市の身上も余かどのつくることをなり世
間人のうぢを意地づくの板よりあやまて柳川の新へ
通ひ金を費やし度まで度ましく関ることを女の
狭き志より浅くの用心家尻市深く思ひよ
分て安用として居まじきを憂しまぐら潔く
とゝのゆるその言葉ありとこゝろびとあるべ
うちゝど内外のことをとゝしく関て信切なるべ
さぞ或苦労も付さらうが福徳屋の身上に
初づくが見へさうなるとゝろて お孫さも母子を養ふ人かどのうを
差支も付まひと思ふがそれとも支婦の情合を思ひて姫
終のことと仏付ことが有うべ子なるして見る 始
嬉しのお孫さんがいろもの稽古 肝癪をあとさるひで左様に
あやうをきことをふモウ〳〵安心いたしまし
トあまりようお婚入こびるやうも家尻市の身の費を
いまし婦美門の関安とゝりて さんぐ相談の益に
えべき別存をゝとけまべ生涯義を好む癖ある

内あるに、まづ壁に、まうせあり、場を立て孤なる、嗅女とあつて、
この樂しみをせば、一しれうちんと、兼和する人は、まづ、紫若き、
子宮のみ、あつぶ、けれ、抑川ふ、ふつ〳〵、ぶうつり、又
一方に、人、臭、よりも、いてみ、しれ、抑、帝、まづ、あ、場の
つつに、あさぐひける、
場へ、アアレサ、柳川さんと、ある、遠の、久、宗へ、だうア、ふ、ある、さんあ、ぶ、
嫌に、まに、久、いひ、ものが、あるものの、場へ、実ふに、まに、まく、あ、
のを、幸ひに、不幸に、おを、でぶ、屋で、ござるまに、

第二十二章

淵へ、瀬と、変る、あつ、ひと、ひ、あつ、男、ひ、げける、あ、縁、不縁、を、
遂に、まぬ、意、あつ、ぶ、宮、初、つ、結ぶで、あるべき、ものを、侍に、あつ、
ぬが、宮、つ、嫌ひ、一人ぶ、好に、あり、好る、人が、居、ものに、相、あつ、ぶ、
中も、ちぶ、の、張に、意、こぶ、まに、あ、異、けまと、意、る、間に、又、も、
恭ひ、ひと、ひ、まに、ぬ、中と、結ぶ、縁、の、ある、を、男、ぶ、あつ、に、
男女の、縁の、善悪、他、屋で、浮、の、あつ、ぶ、ものの、再、洗、場、
宮、屋、布、の、表、を、案じて、浮、切に、まに、ぶ、に、を、場、出、して

鶴が島なる秋元町へ興女とあがて出し所へ来る客の評判
よく忽ち中裏の指所とうぐ人らも繁昌のりん方もみし
て是より後ハ宗次郎の心ぞ浮ふあがて柳川の
ゑ香成の霧雲しけるが柳川もまた文次郎の変ハりぐ
せしゑ此頃ハ一向宗次郎を切ふのやうしけ共元来年若き
長うゑねば宗次郎も恋情のものゑ第四多竟ふ
柳川を身請して周る新乃人家をこゑ人禅女一人を分て
重ふ久ゑる様ぶ所ふと楽しむ男の心汲ゑ

あやしけを強ふハ柳川も浪の憂苦労をこゑまて義
理を捨ゑるどゑ宗次郎ふ身を任せゑぞ本意なき人情とも
りべきゑ周ぐ身分と高ゑる浪ふ勢せ柳さんもり記
久ト裏口の障子をあけて顔ゑ出し ヨヤ大ゑ人早く
化粧が出きゑれ人分所ぞ人ふ出ゑ イエ分更も沙ふ
ぐゑ今ハモウ先刻記ゑハあゑを買物ふ参ゑゑ例ゑ
余程早ふョ せゑ 長久私も毎度ゑゑ早く記ゑゑふ
記して様ぶと男ゑて来ゑ ソレハ大きふ心苦労

さるごろけまの伺卒お拾び年成て行下まし〳〵ナニサ
拾べのを聞くうけるのでハ身ひが実ハ友達ハ有ら
ぢやアあるまいとのひるごろより
達といへば裏のお秋さんハ伺拾しまして明日開さ
ゲ子伺拾しても田舎の分限の方へ嫁こまるをサ
うひそのごねん新さんとやらの伺清ハ智恵のうへ
伺ふまくの田舎の方へ金の都合を付て伺とのうてるを
伺命ふお秋さんハ小学ん
ども迷て伺ごけまども

親が邪見ごろうまあるまいとハ
へヤ左様ス若者そのごねん お秋さんの心中ハ伺拾ごろ
浮世ふ苦労の身ものとのふけまど中ハ一旦知と
思ふ人の伺ふ家ゲ知まてもあひとのふ
苦労ハ一人ありても一人有ろ事ぶつ 左拾でも身ヨ縁
関て見ると各ふ意しもの人へ別まて居るものヤ縁
切ろうまひけまバ身ろうまひとのふ中も左ハ子
だゲ子別まて居ても縁さ人あまバ情人ス逢まるとのハ

まぐ頼ミなどがあるけきどトるう〜
支を思ひ出してう涙を賜ふ
うるめ
〜まとふ私の張る出しの臭のよハ千人ニ一人も
あるまじと思ふハるト膝ニ赤ホロリと恵露ハ萩よりも多い
あるやうふ兵衛と申〜妻ニ言ふ
〜行を思ひ出して
張ふ 精ごそ〜てア潤をとびきと涙どの支がお茶の
臭るもあるうれ人且那といハバあの通り好男で居き〜ムて
茶支ニ氣がお付ゆり形して居るこうも苦労ハあり
そふもあひんぐるま実正ハ長屋中でおれ
〜

ぐるて居るふ私ゑんぐるお茶の且那の張る人の世話ふ多る
のごとそまとふ〜行るも他ふ居ニハ多ハヨ〜他見で
お着ゆるバ左張ぐらうがふ私の臭ニ多て着ると
形して居るのが本意でも今ニ多て着ると両方ふ
義理がありて自由ふ多ぐ支を臭ニ着ると
思ひて居る人のなるもおまぐトいふ大根を馬ふ分て
賣歩行ふ手が影道を通り多ぐう鼻唄を唄ふ
今ハ行張のふ知で居る人ゑ完の胸

せ〻やとんぢ辻たゞこまとぢやゝ　お祐も今の且那の外ゝ源
男ゝておまのおかがあるのゝ人ト聞きて　お柳ハ仏牙ゑぐを
横ゝ　ナニ左程でもあひがゝてこゝを考へゞ〻て見ると
冷ゝふ出ゝとゝやたゝるひとけが有るものゞれ人ト他の性癖
鼻に引留て　あゝ〻〻と せ〻　お柳が知ハ何の為ゑうゞとゝゞ
ねゝふ

初編ふ記せ〻　彼文次郎ハ急ふ角ゝ旅命のとゝのゝ
うち続き便りふ男ハ母親も病死〻て動揺のゝとび

夏の網も切と文次郎ハ田舎の親類を仏壇に母の位牌
ゑまゞとて頼母〻〻下總の小見川とゝふ所へ行て久〻く
音信も絶て縁の切まゝゝるゞごゝ〻さてお柳の身ハ夫親
ゝもふ亡人ゝゝり今ハ伯母をゝ引て母ゝも思ゝたのゝ
まる夏ゑまゞハけゞ宗次郎ふ身を寄て一度廓を出ゝ
すまゞ又文次郎ゝも逢ゝ限ゝもあゞ〻ゝの人伯母の美見ゝ
あゝゞゞ一ツゝふ勝ゝもあゝね宗次郎　ゑまゞまゞ今の身ゝ
ゝり〻ゝゝあゝまゞゝ文次郎のゝゝを思ひ〻〻〻善

悪よつきて父を痛めるあもはきうるあるしーうるあ

「そして生活も知るはあるひうう毎日紙を自殺をつけて婆々ざ

ーを付きぐうは父居ふでも自分と気で居うはト茶後礼う新

の風情和合同志として お勢ハ咎めず 倶よ私ひを含ろく「ヲヤ

そんでハ先達 私ハ人よ聞うぐ お系の本宅ふ行をの時分て病

令のあうと文さんとやうぐ 何の張う成ぐをりふ時ぐあうぐ其

の方さを渡かしも便ふハ自ひの人たしう船中で怪我ぐ成でハ自人

ーうくそんぐうう手時そを限ふ自うて付きうくを男ふトうふ

変もあと又手渡達うとの人もあるうう宅ふ気よううて

自うう自ひヨトたるーのあうう表の方ふ人音して男へイおー出見

自さうるまーお郷さんのお宅ハ此方でぐざるまうう「ハイ雑

さ人でぐざるまうト中義居を明て良見合せ「ヲヤ安さん久

宅ふお邪ろーのね人ヲお遠入り成ようく此所ぶ和れまーこ子

サア此方へおさん自さうる自浦も居ふせんヨ安ーさう左振自ろ一ツぷく

の香で糸ろまもう巾見自さうるまート表裏ままふーー気を

配ア自ぐう宅ふ入ろハ文沈の友達うてお郷も別て公

ゆく〳〵せ〳〵人ゆり「まことふ久〳〵〳〵お目ふかゝらるゝ子今
日ハ何張して此所をお通やるゝけ須ぢやア けを所ゝお立ち
安「ナニ 則ぢう 汐桑の所ゝぢゝ子 今日ハ此頼まれゝこゝろ
あつてよト 何ゝお称ゝ用あり 急と思て とるお勢ハ如ゝ〳〵
せ〳〵 私やア まゝ待て 参るヨ お桑さん此ゆゝとあゝ〳〵歳
〳〵ト 裏口ゝ出て 汐〳〵 後ゝて 彼男ハ懐中ゝ手紙
を出し 安「ゝゝハ文さんゝ頼んでゝゝ〳〵ゝ何ゝ後日
お返ゝせ〳〵 此ゝ 芝人 急てもモウ汐桑の張ゝ中ふ

成度とゝハ 何ぞもあるまゝ 先月田舎ゝ 帰ゝて 来て 居張
ゝと真ふ 頼ゝ 分て 宅ふ ゝゝり 切ゝて 居るのサト 聞ゝより
ハツトお柳ゝ 狼ドキ〳〵 ゝゝる ゝゝ まゝ出し〳〵 「ア 文さんが
田舎ゝ 帰ゝて 来ゝと 喧ぢやア あゝるゝ せんゝ 安「ナニゝゝハ
喧ゝ ゝゝゝ ゝゝゝ ゝゝ 文さんも 左張 云つて 居るのゝ 減ゝ
〳〵〳〵 便ゝ せゝゝ ゝゝ 死んゝゝ 男ゝて 居るゝゝ
ゝゝ 警 何張ゝ ゝ 奥ふ ゝゝて 居ゝゝ ゝゝ 嬉ゝ
ゝゝゝ 泣〳〵 言ゝ ゝゝ 変ゝ ゝゝ 限ゝて ゝ 義理ゝ

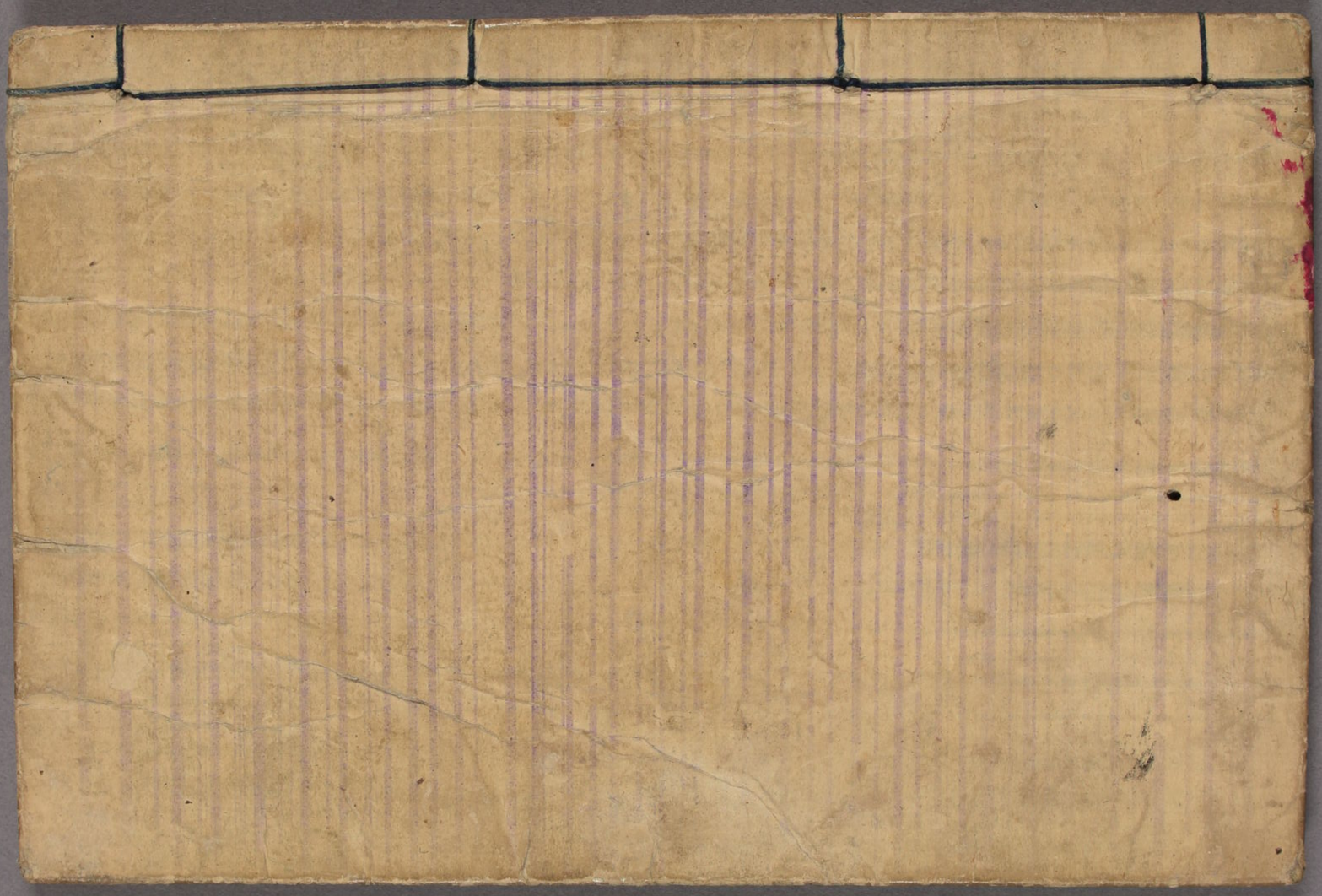
こゝろのうち何卒不法ふしゝて居さ難義のこゝけや何うを
たゞ〳〵呉ろと頼んでよこす〳〵発成さのサ
ト云まつり文次郎の親淵してあやう〳〵度ゞくく〳〵
ねがうり當時濱清町とのゝる橋番人仮住居ゝ
弥ゝ病気ゝて居る中をとゞ屋ふまた〳〵宗次郎様
関せず〳〵書ゝて手紙を渡〳〵そも〳〵立帰る
左様ゝう安さル宅ふ〳〵でト遊て出る門のうち
何時のろふゝ宗次郎様裏口より立入て火鉢の傍ゝある

手紙をまた先ゝ上ゝて〳〵ゝ〳〵お郷ハ渡資をゝ人を見て
ハツト思へど外をあづり矢頼をつゝゝて
何時のろゝ知ゝ成ふ〳〵さツた知ゝ〳〵〳〵ゝ
〳〵ゝ〳〵ゝ情人のお爲ゞ出て ハイサ思ひもよらぬ人
時ゝ〳〵ゝ手紙をよゝ〳〵ハトあづり〳〵手紙で
養母さゞ〳〵ゝ尚ゝの氣の毒さ貞節と頼を赤ゝて
涙ぐむこゝ屋理ゝ

作者曰ゝ〳〵お郷の訪爲を浄留理本の根や合巻

のお姫さまと同じ沙門にあるまじきことなれども
たゞ人情人のあるとも流れて沉み〳〵後の世ハ
素人とあらべて論じがたし〳〵まこと二仏あるものゝあるべ
便りなき女の身にて種〳〵ふうつゞくもやゆるるを沙門
所為とて苦〳〵苦悪ともふ婦人ゆゑ善悪ふ悔しきものハあ
らじと沛〳〵ゆるせうあるべし〳〵

爲永門人 春曉 執筆

爲永門人 春江 校合

春色英對暖語 巻之十一了